

日米高校生の比較調査についての一考察

教育社会学研究室 渡 部 真

A Study on a Comparative Investigation of American and Japanese High School Students

Makoto WATABE

This paper examines the comparison of American and Japanese high school students: behavior patterns and aspects of values. It also refers to the problems and the desirable course of the internationally comparative investigation in educational field. A data "A Comparative Investigation of American and Japanese High school students (Japan Youth Research Institute, 1979)" is used here.

The contents are described as follows:

1. Introduction
2. Consiousness of Problems, and Hypothesis
3. Outline of Investigation and Constitution of Sample
4. Aspects of Life and Plans of Future of High School Students
5. Relations to friends and Dating of High School Students
6. Views of Teachers
7. Conclusion

目 次

- I. はじめに
- II. 問題意識と仮説
- III. 調査の概略とサンプルの属性
- IV. 高校生の人生観と将来の生活設計
- V. 高校生の友人関係と男女交際
- VI. 高校生の教師観
- VII. まとめ

I. はじめに

本稿は、日本とアメリカの高校生の行動様式や価値観を比較するものである。また、教育の領域における国際比較調査のもつ問題点や、あるべき方向についても言及する。用いる資料は、筆者も調査の分析、報告書の執筆に加わった「日米高校生調査」(日本青少年研究所, 1979年)である。この報告書においては、日米両国の単純比較、日本における属性別クロス集計、日米高校生の類型分類などが行なわれたが、本稿では、新たな視点からの再分析をこころみることにする。

II. 問題意識と仮説

教育社会学では、多量のサンプルからなる量的データをもとにした教育調査が、しばしば試みられる。特に、生徒の行動様式や価値観(生徒文化)を探り、そこからよりよい生徒指導の方針を得ようとする場合には、生徒を対象とした調査がきわめて重要なものとなってくる。なかでも、国際比較調査は、国内の調査では見落されがちな種々の知見を見いだすことができるので、大変有意義である。

「日米高校比較調査」では、次のような点を確認することができた。①日本の高校生の交友関係は、学校内、同学年、同性関係に閉じ込めりがちなのに対して、アメリカの高校生の交友関係は、学校外、異学年、異性関係にまで幅広く開かれている。

②日本の高校では、規律に厳しい先生が多く、相談にのってくれる先生が少ないのに対して、アメリカでは、気楽に相談できる先生が多くなっている。

③日本の高校では、規則重視と教科重視が教育指導の特色になっている学校が多いのに対して、アメリカの高

校では、多様な教育指導がとられていることが多い。

④日本の高校生は、大学に入ってから「交友」「スポーツ」「のんびりすごす」等に力を入れたいと考えているのに対して、アメリカの高校生は、「学問、資格、技術を身につけたい」と考えている。

⑤日本の高校生の生活時間は、勉強時間、テレビ視聴時間などが長いのに対して、アメリカでは、家の手伝い、アルバイト、外出時間などが長くなっている。

しかしながら、国際比較調査が陥りやすいいくつかの問題点も分析の過程であきらかになった。まず第一に、これはよく指摘されることであるが、言語の問題がある。日本の質問票の内容を、英語に完全に移しかえられているか、質問票が意味している内容は、日米全く同じものかどうかという問題である。

第二に、文化差の問題がある。これは満足度や価値観を聞いた時に、もっとも大きな問題となる。たとえば、生活全般への満足度を、日米両国の高校生に質問すると、満足度はアメリカの方で大幅に高くなる。この結果だけを見ると、アメリカの高校生の方が、日本の高校生よりも、充実した生活を送っていると考えられるのだが、事実はより複雑である。なぜなら、この質問を、日米の青年全般を対象に行なっても、成人や老人に行なっても、ほぼ同じ結果が得られるからである。年齢層を問わず、生活全般への満足度は、アメリカの方が高いのである。したがって、高校生の満足度が、アメリカの方で高くとも、何の不思議もない。よって、高校生の満足度の問題だけを取り出して論じてみても、あまり意味がないのである。問題は、なぜ多くの日本人は、生活に満足していないと答え、アメリカ人は満足していると答えるのかという点である。

考え方は二通りある。第一は、実際に、アメリカ人の生活全般に対する満足度が、日本人より高くなっているという考え方である。第二は、日本人とアメリカ人の反応パターンの差ではないかという考え方である。日本人とアメリカ人の生活に対する満足度がほぼ同じであったとしても、「生活に満足していますか」と問われると、アメリカの方が積極的な反応を示す、つまり国民性の違い、文化の違いが、反応パターンの差として、回答状況に反映してしまうのではないかという考え方である。

われわれは、国際比較調査を重ねるにしたがって、第二の考え方も考慮に入れないと、現状を分析し得ないことに気がついた。たとえば、今回の調査では、「両親はあなたのことを自慢に思っていますか」という質問を、日米の高校生にしているが、アメリカでは、86%の高校生が肯定しているのに対して、日本では、46%にしか

らない。この結果を分析する場合、単純に、アメリカの親の方が、日本の親に比べて、子どもを自慢することが圧倒的に多いと考えるのは間違っている²⁾。アメリカでは、本当はあまり自慢に思っていない子どもでも、「自慢に思う」と答えることが多いのに対し、日本では、実際にはかなり自慢に思っている「自慢に思う」とは答えないからである。

以上のことから考えると、日米比較の数値を、そのまま単純に比較するのは、大変危険であることがわかる。それでは、国際比較から得られる数値を、信頼性のあるものとして利用するには、どのような操作が必要であろうか。それには、まず、各国のサンプルの内部関連構造を問題にすべきである。

たとえば、高校生を、大学進学を考えている層と、いない層に分け、日本ではこの二つの層の間に、学校への満足度に大きな隔りがあるのに、アメリカでは差が小さいといったように、一つ一つの項目について、被質問者の属性ごとの検討を行ない、それを比較するのである。このような方法をとれば、日米の高校生の間で、進学、非進学の持つ意味の違いを全体として考察することができるのである。

進学、非進学のほかに、同じような方法で、高校の課程の差異、男女差、学年差などが日米でおのおのどのような意味を持つのかを考えることができる。つまり、日米の高校生を直接比較するのではなく、属性を媒介にして、間接的に比較する手法を考えるべきなのである。

以上のような問題意識から、本稿では男女差の問題をとりあげる。検証する仮説は次のとおりである。

日本では、男子であるか女子であるかにより、しつけ方を変えるという考え方が残存している。たとえば、ある調査の結果によれば、日本の母親は、男子のしつけの重点を、「勉強すること」に置くのに対し、女子の重点は、「女の子らしさ」や「手伝い」になっている³⁾。これは、伝統的に社会から期待されている性役割の差が、親の意識にそのまま反映されている結果といえよう。社会における、あからさまな男女差別は、以前ほどではなくなってきたが、社会から人々に期待されている役割は、依然、性によって大きく異なっているのである。したがって、高校生の行動様式や価値観もその影響を受け、性の違いから生ずる差異が依然として大きいのではないかと考えられる。

これに対してアメリカでは、男女平等の理念が以前から広くゆきわたっており、このような性の違いから生ずるしつけ方の差異が、日本ほどはっきり残っておらず、そのために、高校生の価値観や行動様式にも、性による

差があまり生じていないのではないと思われる。そこで、日米の高校生それぞれにとって、男女の差がどのような意味を持つのかを、いくつかの領域に分けて検討する。

分析の手順は、まず調査の概略やサンプルの基本的属性などを簡単に述べ(Ⅲ)、ついで「人生観」(Ⅳ)、「友人・異性観」(Ⅴ)、「教師観」(Ⅵ)などの領域について検討を行ない、最後に、前述の仮説が検証されたか否かについての考察を行なう(Ⅶ)。

Ⅲ. 調査の概略とサンプルの属性

本稿で分析に用いる「日米高校生比較調査」は、昭和53年4月から5月にかけて、日米の高校生、おのおの1,500人余りを対象に実施された。調査対象校は、日本は13校、アメリカは28校であり、日米のサンプルに片寄りが生じないように選定された。質問内容は、友人関係、異性関係、教師一生徒関係、授業観、成績観、人生観、クラブ活動、生きがい、親子関係など多岐にわたっている。

サンプルの基本的属性としては、性、学科、父親の職業、父親の学歴、母親の就労、母親の学歴、本人の進路志望などを尋ねた。

表1 高校卒業後の希望進路(日米、男女別)

	日本		アメリカ		性比	
	男子	女子	男子	女子	日本	アメリカ
1. 仕事をもつ	27.0	35.8	7.6	11.8	133	155
2. 家事・家の手伝い	0.5	0.4	0.3	2.3	80	767
3. 各種学校・専修学校・職業訓練校	6.1	8.9	5.9	5.0	146	85
4. 短期大学	1.0	10.5	9.2	13.6	1050	148
5. 4年制大学(私立)	22.1	29.1	16.7	16.4	132	98
6. 4年制大学(国公立)	35.8	10.8	33.3	37.6	30	113
7. その他	1.0	0.7	6.4	3.9	70	61
8. まだ決めていない	5.3	3.2	2.0	1.4	60	70

本稿で特に問題としたいのは、男子と女子の回答状況が、日米間で大きく異なる項目であるが、以上の属性の中では、本人の希望進路をあげることができる。表1は、その状況を、日米、男女別にあらわしたものである。なお性比とは、おのおのの国において、女子が「Yes」と答えた割合を、男子が「Yes」と答えた割合で割り、それに100をかけたものである。つまり、性比=(女

子がYesと答えた%/男子がYesと答えた%)×100であり、女子の方が肯定した割合が高い項目では性比が100以上となり、男子の方が高い項目では、性比が100以下となる。

まず日本について検討すると、高卒後、仕事をもつと答えた者は、女子が35.8%、男子が27.0%と女子がやや多くなっている(性比133)。また、4年制大学への進学希望者を見ると、国公立大希望では男子がかなり多くなるが(男子35.8%、女子10.8%、性比30)、私立大希望では、やや女子が多くなる(男子22.1%、女子29.1%、性比132)。また短期大学への進学希望は、女子が圧倒的に多い(男子1.0%、女子10.5%、性比1050)。

これに対してアメリカでは、「仕事をもつ」が男子7.6%、女子11.8%と、やはり女子で多くなっている(性比155)。ところが、4年制大学をみると、国立公大への進学希望が日本とは逆に、やや女子で多くなっている(男子33.3%、女子37.6%、性比113)。私立大学への進学希望は、男女ほぼ同じ割合である(性比98)。また、短期大学への進学希望も、日本のように男女差が大きいということはなく、各種学校、専修学校、職業訓練校への進学希望も、男女ほぼ同じ割合である(性比85)。

以上からわかることは、アメリカの方が、日本よりも、男女の別により希望進路に差異が生じないということである。日本では、国公立大への進学希望は男子が著しく多く、他への進学希望は女子が多くなるのに対して、アメリカでは、各進学希望の性比が100前後で、あまり揺れが激しくないのである。この日米間の希望進路の違いが、他の意識や価値観にどのような影響を与えているかは、見逃すことのできない点といえる。

他の基本属性については、前にも述べたように、日米とも大きな差は生じていなかった。

Ⅳ. 高校生の人生観と将来の生活設計

次に、「将来どんな生活を送りたいか」という、広い意味での人生観を尋ねた結果を検討してみたい。表2は、その結果を、日米、男女別に示したものである。Aの「高い社会的地位につく」、Bの「経済的に裕福な生活を送る」の2つは、「功利的価値(世俗的成功)」志向にあてはまり、Cの「自分の趣味にあったらしをする」、Dの「のんびりと気楽にくらす」、Eの「幸福な家庭生活を送る」は「私的自由」志向にあたるのに対して、Fの「社会のために役立つ生き方をする」は「社会的価値」志向とでもいうべきものである⁹⁾。これに類する質問は、日本国内では戦前から行なわれており、戦後

表2 将来、送りたい生活(日米、男女別)
——きわめて重要と考える割合——

	日本		アメリカ		性比	
	男子	女子	男子	女子	日本	アメリカ
	%	%	%	%		
A. 高い社会的地位につく	13.8	4.8	24.9	18.6	35	75
B. 経済的に裕福な生活を送る	43.6	35.2	45.0	23.4	81	52
C. 趣味にあったくらしをする	63.4	62.6	82.2	84.9	99	103
D. のんびりと気楽にくらす	40.0	35.5	44.0	39.8	89	90
E. 幸福な家庭生活を送る	81.0	82.8	83.6	85.4	102	102
F. 社会のために役立つ生き方をする	20.9	13.8	29.5	35.8	66	121

「社会的価値」志向の割合が大きく減少し、その分「私的自由」志向の割合がふえていると指摘されている⁹⁾。特に青年層では、「私的自由」を志向するものが圧倒的に多くなっている。

まずAの「高い社会的地位につく」をみると、日本では、男子が13.8%、女子が4.8%と、女子で「きわめて重要」と答える者がかなり少なくなっている(性比35)。ところがアメリカでは、男子24.9%、女子18.6%と、日本より「きわめて重要」と答える者が多いうえに、性による差が日本ほど大きくないのである(性比75)。これは、女性が高い社会的地位につく可能性が、アメリカの方で高い結果であろう。このことはまた、前述の希望進路の男女差が、アメリカで小さいことの反映でもある。

Bの「経済的に裕福な生活を送る」ことが「きわめて重要」とした高校生は、日本、アメリカとも男子生徒の方の割合が高いが、特にアメリカで、男女差が大きくなっている(性比、日本—81、アメリカ—52)。

次にCからEの「私的自由」志向にかかわる質問をみると、どの項目も男女差がほとんどないことがわかる。Dの「のんびりと気楽にくらす」は、日米ともやや男子が多いが、(性比、日本—89、アメリカ—90)、C、Eでは、ほとんど男女差がない。私的自由を重んずるという傾向は、日米の高校生の間に広くひろがっており、性の差や国の違いは影響しないのである。

最後に、Fの「社会のために役立つ生き方をする」という「社会的価値」志向について調べてみよう。表2によると、日本では「きわめて重要」とする者が、男子20.9%、女子13.8%と男子の高校生で多いが(性比66)、アメリカでは逆に、男子29.5%、女子35.8%と女子の方が多くなっている(性比121)。アメリカでは、高い社会的地位についたり、経済的に裕福な生活を送る「功利的

表3 将来の生活設計(日米、男女別)

	日本		アメリカ		性比	
	男子	女子	男子	女子	日本	アメリカ
	%	%	%	%		
A. 高校卒業後は親から離れてくらす	46.6	30.9	51.5	52.5	60	102
B. 結婚は、男性が自分で仕事を持つまで待った方がよい	83.5	88.2	87.4	85.4	106	98
C. 親が年を取って働けなくなったら、生活費の大部分を援助する	87.8	79.5	87.9	90.1	91	103

価値」志向をとる女子が、男子より少ないが、その反面、社会のために役立つ生き方をしたいという「社会的価値」を志向する女子は、男子よりやや多くなっている。ところが、日本の女子高校生は、「功利的価値」志向が男子より弱いだけでなく、「社会的価値」を志向する者も少なくなっており、それだけ、「私的価値」だけを理想とする傾向が強くなっている。また性比を日米比較すると、アメリカの方が性比の揺れが小さく(Bを除く)、性による価値観の差が少ないと指摘できる。

次に、上の質問と関連して、高校生の将来の生活設計に関する3つの質問を試みた。表3は、その結果を、日米、男女別にまとめたものであるが、Aの「高校卒業後は、親から離れてくらすつもりか」に対して、アメリカでは、男子が51.5%、女子が52.5%、「ハイ」と答えていて差異はない(性比102)。しかし日本では、男子が46.6%、女子が30.9%と、男子の方が親から離れてくらす場合が多くなっている(性比66)。

またBの「結婚は、男性が自分で仕事を持つまで待った方がよいと思うか」という質問に対しては、日米とも男女差はなく、8割以上の者が肯定している。

Cの「親が年をとって働けなくなった時、あなたは親の生活費の大部分を援助するか」という質問に対して、男子の回答状況は、日米同じであるが、女子にはやや差がみられる。したがって、性比は日本とアメリカで異なっている(性比、日本—91、アメリカ—103)。日本では、男子が、親の老後の面倒をみるという考え方が過去においては、一般的であった。そしてその考え方が、高校生の考え方にもわずかながらも反映していたわけだが、アメリカではそうした男女差はみられず、男女とも約9割の高校生が、親の生活費の大部分を援助すると答えているのである。

以上、人生観をはじめとする将来の生活への展望に関する質問の回答状況をまとめてみると、①性差による価値観の違いは、日本の高校生で多くみられ、アメリカで少ない。②性差による違いが、日米ともにみられ

なかった項目も存在する、などとまとめることができる。

V. 高校生の友人関係と男女交際

次に、高校生の友人関係や男女交際をめぐる意識、またそれにかかわる親や教師の態度について検討してみよう。

表4 個人的に親しく付き合っている友人数 (日米, 男女別)

	日本		アメリカ		性比	
	男子	女子	男子	女子	日本	アメリカ
1. いない	4.4	1.3	1.9	1.5	30	79
2. 1~2人	11.5	9.7	18.7	18.7	84	100
3. 3~5人	42.4	47.7	38.7	45.9	113	119
4. 6~9人	22.6	25.8	16.7	19.1	114	114
5. 10人以上	18.9	14.6	21.0	12.8	77	61

表4は、「個人的に親しく付き合っている友人は、何人くらいいますか」という質問の回答結果を、日米、男女別にまとめたものである。まず「親しい友人はいない」と答えた生徒が日米ともごく少ないことに注目したい。中では、日本の男子が、他よりやや多くなっている。

逆に、「親しい友人が10人以上いる」と答えた者の割合を調べてみると、日本では、男子が18.9%、女子が14.6% (性比77)、アメリカでは、男子が21.0%、女子が12.8% (性比61) と、日米とも男子の方が女子よりもかなり多くなっていることがわかる。

また友人数「3~5人」「6~9人」は、日米ともに女子の方がやや多くなっている。結局、友人数については、日米に共通した男女差の傾向がみられるという結果になった。

次に、親しい友人とは、どのような友人であり、またどのようなことがよく話題になるのかを調べてみよう。

表5は、その結果をまとめたものであるが、A「学校外で毎日つきあっている」、B「異性も友人の中に含まれる」、C「グループのメンバーはほとんど同じ学年」として見ると、前にも述べたように、アメリカの高校生の友人関係が、幅広いのに対し、日本の高校生のそれが狭く、人間関係が同質的であることがわかる。

これを男女別で検討してみると、A「学校外で毎日つきあっている」は、アメリカではほとんど同じ割合であ

表5 友人の範囲や友人との話題 (日米, 男女別)

	日本		アメリカ		性比	
	男子	女子	男子	女子	日本	アメリカ
A. 学校外で毎日つきあっている	28.8	19.4	54.6	51.7	67	95
B. 異性も友人の中に含まれている	25.7	28.4	84.3	88.1	111	105
C. グループのメンバーはほとんど同じ学年	90.4	94.2	53.6	59.9	104	112
D. 勉強や試験のことがよく話題になる	47.3	48.4	46.7	58.2	102	125
E. 音楽のことがよく話題になる	55.8	52.0	77.4	80.0	93	103
F. 異性のことがよく話題になる	66.2	63.1	78.1	82.1	95	105

(性比=女子が肯定した%/男子が肯定した%×100)

るが(性比95)、日本では、男子が28.8%と女子の19.4%よりもやや多くなっている(性比67)。

「異性も友人の中に含まれている」「グループのメンバーは、ほとんど同じ学年」と答えたものの男女差は、日米ともほとんどなかった。友人選択にあたって、性差の持つ意味は、日米とも小さくなっている。

次に、友人とどんなことがよく話題になるかを質問した項目(D~F)を検討してみよう。日米を単純に比較すると、「音楽のこと」「異性のこと」がアメリカで多く、「勉強や試験のこと」はほぼ同じ程度となっている。

男女差をみると、「勉強や試験のこと」は、日本ではほぼ同じ割合(性比102)、アメリカではやや女子が多い(性比125)という結果がでている。また「音楽」や「異性」のことについては、日本では男子の方がやや話題にすることが多く、アメリカでは女子の方がやや多いが、きわだった差とはいえない。

総じて、友人の範囲や友人との話題の内容に関して、日米ともきわだった男女差はみられなかったといえる。仮説で述べた、日本では高校生の行動様式や価値観に男女差が大きく、アメリカでは小さいという見方は、友人関係に関する限り、あてはまらないようである。

さらに、友人関係の中でも、男女交際について両親や学校の教師がどのような考えを持っているのかを、生徒たちに質問した。

まず両親の考え方について、5つの選択肢から1つを選ばせたところ、表6のような結果を得た。日本の場合、「当人にまかせる」もしくは「無関心である」という不干渉派が全体の7割をしめ、「実際の相手としてふさわしいのかどうかについて意見をいう」「異性との交際は、まだ早すぎる」というなどの干渉派は、それぞれ

表6 男女交際についての両親の考え方
(日米, 男女別)

	日本		アメリカ		性比	
	男子	女子	男子	女子	日本	アメリカ
1. 交際をすすめ、援助してくれる	2.9	2.9	16.8	19.1	100	114
2. 交際の相手としてふさわしいかどうかについて意見を言う	7.8	18.8	14.4	33.7	241	234
3. 異性との交際は、まだ早すぎるという	6.0	19.1	1.6	1.5	31	94
4. 自分にまかせてくれる	53.9	46.1	49.7	34.6	86	70
5. 無関心である	27.1	10.8	6.8	3.0	40	44

1割程度にすぎない。特に注目すべきなのは「交際をすすめ、援助してくれる親」が、わずか2.9%しかないことである。

男子生徒の親と女子生徒の親を比較してみると、「自分にまかせてくれる」は男子生徒の親にやや多く(性比86)、「無関心である」も男子生徒の場合にかなり多くなっている(性比40)。日本では、子どもが男子か女子かにより、親の考え方が著しく異なっているのである。

アメリカでは、干渉しない親が半分近くをしめているが、その中では、当人にさせる親が多くなっており、無関心であるというのは、5.0%にしかすぎない。アメリカでは、子どもの異性関係に無関心な親はごく少ないのである。また日本に比べて、意見を言ったり、交際をすすめる親が多いことも特徴的である。

男子生徒と女子生徒との違いをみると、「自分にまかせてくれる」が男子で多く(性比70)、その分「交際の相手としてふさわしいかどうかについて意見を言う」が女子で多くなっている(性比234)。この傾向は日本と変わらないが、「異性との交際はまだ早すぎる」と考える親が、日本とは違い、男女ともほとんどいなくなっている(男子1.6%, 女子1.5%)。

次に、高校の教師が、男女交際についてどのような考え方を持っているのかを生徒に尋ねた。

結果は表7のとうりであるが、日本では、「無関心である」が最も多く、ついで「異性との交際はまだ早すぎるという」「自分にまかせてくれる」がそれに続き、「意見を言う」「交際をすすめ、援助してくれる」は少ない。

男女別に見ると、「無関心である」は男子が多いが(性比69)、「自分にまかせてくれる」(性比127)、「交際はまだ早すぎるという」(性比156)、「意見を言う」(性比135)などは女子の方が多い。「自分にまかせてくれる」が女子生徒に多かったのが、やや意外な結果であっ

表7 男女交際についての教師の考え方
(日米, 男女別)

	日本		アメリカ		性比	
	男子	女子	男子	女子	日本	アメリカ
1. 交際をすすめ、援助してくれる	2.8	0.7	8.8	4.8	25	55
2. 交際の相手としてふさわしいかどうかについて意見を言う	8.4	11.3	2.2	6.3	135	286
3. 異性との交際は、まだ早すぎるという	15.5	24.2	2.8	1.7	156	61
4. 自分にまかせてくれる	16.1	20.5	26.5	26.1	127	98
5. 無関心である	51.3	35.4	41.3	49.6	69	120

た。概して、男女交際に無関心な教師が多いといえる。

ついでアメリカについて見ると、ここでもやはり無関心な教師が多く(45.2%)、「自分にまかせてくれる」(26.1%)をあわせると、7割以上がこの問題に干渉していない。アメリカでは、生徒の男女交際を、生徒指導上の問題ととらえる教師は少ないのである。また興味深いのは、教師の考え方が、生徒の性によって大きく左右されることがないという事実である。これは、日本と異なった点である。

以上、異性問題に対する親と教師の考え方をまとめると次のようになる。①日本の親は、子どもが男子であるか、女子であるかによって、この問題に干渉するか、不干渉であるかが大きく左右される。アメリカでも同じような傾向はあるが、日本ほどはっきりした特徴とはなっていない。またこの問題に無関心な親が、日本では男子生徒に多いが、アメリカでは、男子、女子とも少ない。②日本でもアメリカでも、男女交際の問題に熱心である教師は少ない。特にアメリカでは、生徒の性によらず不干渉である教師が多い。その点、日本では女子生徒に対して、交際の相手について意見を言ったり、交際は早すぎるという教師が多くなっている。

Ⅵ. 高校生の教師観

最後に、高校生の教師観を調べてみたい。質問は、「あなたは、どういう先生に教わりたいですか」というもので、5つの選択肢から1つを選ばせた。

表8は、その回答状況を、日米、男女別にまとめたものであるが、日本では「何でも気楽に相談できる先生」が圧倒的に多く、ついで「授業に熱心な先生」「専門の研究にすぐれた先生」であり、「規律にきびしい先生」「部やクラブに熱心な先生」は少なくなっている。男女

表8 教わりたい先生のタイプ(日米, 男女別)

	日本		アメリカ		性比	
	男子	女子	男子	女子	日本	アメリカ
1. 専門の研究にすぐれた先生	10.4	7.7	17.2	15.8	74	92
2. 授業に熱心な先生	10.9	13.4	43.1	53.0	123	123
3. 何でも気楽に相談できる先生	69.9	73.9	31.0	25.9	106	84
4. 部やクラブに熱心な先生	5.7	3.3	5.6	2.5	58	45
5. 規律にきびしい先生	0.7	0.5	0.4	0.3	71	75

別でみると「授業に熱心な先生」(性比123), 「何でも気楽に相談できる先生」(性比106)は女子が多く, 他は男子で多いという結果がでている。

アメリカでは, 日本と違い「授業に熱心な先生」が最も多く, ついで「何でも気楽に相談できる先生」「専門の研究にすぐれた先生」の順である。「規律にきびしい先生」「部やクラブ活動に熱心な先生」が少ないのは日本と同じである。

男女別で見ると, 「授業に熱心な先生」は女子が多く, その他はすべて男子で多くなっている。

結局, 性差から生ずる回答傾向の差異は, 表8の性比を見てもわかるように, 日米ほとんど同じになっている。日本で性による差が大きく, アメリカで小さいのではないかという仮説は, ここでも支持されなかった。

Ⅶ. ま と め

本稿は, 国際比較調査から得られる数値を信頼性のあるものとして利用するにはどうしたらよいかを考え, そのあるべき方向について言及した。そして, その実証研究の1つとして, 実際に仮説をたて, それが検証されるか否かを検討した。

その仮説を略述すると, 日本では, 高校生の価値観や行動様式が, 男子であるか女子であるかによって, 大きく異なるのに対し, アメリカでは, あまり変化しないのではないかということであった。得られた結果は以下のとおりである。

①希望進路は, アメリカの方が, 男女の別により差異を生じない。たとえば, 日本では, 国公立の4年制大学は男子が多く志望し, 短期大学や, 専修学校などは女子が多く志望するが, アメリカではそうした傾向がない。

②人生観や将来の生活設計を尋ねると, 概して, アメリカの方が性による差が小さい。日本では特に, 「高い社会的地位につく」「社会のために役立つ生き方をする」

と答えた女子が, 男子に比べて少なくなっている。

③友人数は, 日本とアメリカに共通した男女差の傾向が見られた。友人の範囲や友人との話題の内容に関しては, 日米ともきわだった男女差は見られなかった。結局, 友人関係については, 仮説が支持されなかった。

④日本の親は, 子どもの性により, 子どもの男女交際に干渉するかもしれないが大きく左右される。アメリカでも同様な傾向はあるが, 日本ほどではない。教師はどちらの国においても, 男女交際は無関心である。またアメリカの教師は, 男女交際についての考え方が, 生徒の性によって, 日本ほど大きく左右されない。

⑤生徒の教師観では, 「授業に熱心な先生」は日米とも女子が多く希望し, 「専門の研究にすぐれた先生」は日米とも男子が多く望むというように, 日米で同じような傾向がでた。したがって, 生徒の教師観については, 仮説が支持されなかった。

⑥結局, 「友人関係」や「生徒の教師観」については, 仮説が支持されず, 「希望進路」「人生観や将来の生活設計」については仮説が支持された。また「親や教師の男女交際観」もアメリカの方が, 生徒の性によって大きく左右されないことがわかった。

⑦仮説が支持されなかった領域は, 親の意向が子どもに伝わりにくく, 子どもの判断にまかされる部分が多い所といえる。

今後, 今回とりあげなかった領域も含め, より精緻な分析が必要とされよう。また教育における国際比較調査のあるべき方向も, より一層, 検討されなければならないのであろう。

(指導教官松原治郎)

注

- 1) なおこの報告書は, 松原治郎, 高橋均, 武内清, 熊谷文枝, 渡部真, 小林雅之の共同執筆になるものである。
- 2) 熊谷文枝によると, アメリカ人に「ピアノが弾けますか」と質問すると, ドレミファソラシドしか弾けなくとも, 「はい, 弾けます」と答えるのに対し, 日本人は, 自分を売りこむことを期待されていない社会に育っているために, かなりピアノが弾けても, 弾けると答える人は少なくなるという(「現代高校生の生態」(座談会), 地域社会研究所編『コミュニティ』58号, 1980, 70頁)。
- 3) 渡部真, 「家庭教育の実態と母親の意識」, 東京都保谷市教育委員会, 『児童・生徒の校外生活ならびに母親の教育意識に関する調査』, 1980, 130頁。
- 4) 日本青少年研究所「日米高校生比較調査」集計表223頁~248頁より。性比は, 今回新たに算出。
- 5) 井上俊「青年の文化と生活意識」副田義也編『現代のエスプリ86-青年』, 1974年, 至文堂, 114頁。
- 6) 同上, 114頁。
- 7) 渡部真「高校生の人間関係」日本青少年研究所『日米高校生比較調査』, 1979, 31頁~50頁参照。